事後評価報告書

1. 基本情報

- 実行団体
  一般社団法人基山こどもねっと
  基山町に於ける発達障がいがある子供たちへの包括的学習サポート事業
- 資金分配団体
  公益財団 佐賀未来創造基金
- 事業の種類
  草の根活動支援事業
- 実施機関
  2019 年 4 月 1 日～2023 年 3 月 31 日
- 事業対象地域
  佐賀県基山町及び、周辺エリア

2. 事業概要

２－１ 社会的な背景と課題と事業の対象

文部科学省（平成 29 年 5/1）によると、特別支援学級の児童生徒数は約 23 万 6 千人と平成 19 年と比べると 2.1 倍。特別支援学級の児童数が増えている理由として考えられるのが、平成 19 年の特別支援教育制度の改正。発達障がいのある子どもが、より充実した支援を受けられることで、特別支援学級を選択する保護者が増えている。一方、文部科学省は「発達障害の場合、他の障害については特別支援学校等において指導実践の蓄積があることと比較し、指導方法が十分に確立しているとは言い難い」と述べており、審議会等を設置しガイドラインやマニュアル等の設置を急いでいる。

基山町においても発達障がいのある子どもは増加しており、特別支援学級での教育を補填する支援が求められている。中には、感覚過敏などが理由で集団での学校生活が難しく、それが原因で不登校になる子どもも多数いる。

そのような背景の中、当事業では

- 小中学生の個別の学習支援の必要な子どもへの学習の機会の提供
- 未就学児の発達支援

を行っている。

また、就学前から、小学校低学年では、子どもの発達の差が大きく、変化のスピードも早いので他者、特に保護者の関わり方によってその後に大きな差が生じる。このことに対しての対応として保護者や地域の大人への障害に対してや、子どもへの関わり方についての知識の伝授と、支援が求められている。当事業では、子どもだけでなく保護者や保育士や地域住民への学習機会の提供を行っている。

２−２　概要

- 中長期的なアウトカム
  全てのこどもが、その個性を大切にされ、生まれ持った可能性や能力を存分に発揮し、豊かな人生を送ることができる社会の実現
- 短期的なアウトカム
  インクルーシブな環境で学ぶことができる環境を地域の中で作る。
  その環境で、発達障がいの子どもたちが、その特性を理解され学習や発達の機会を得ることができる状態
  また、インクルーシブな教育を地域全体で行うことで、地域共生社会のハブとなるようなコミュニティができている状態
- 活動
  活動は、以下の３つ
  (ア) 活動その１
  小中学校の子供達の個別学習支援「マナビバ」の開催
  個別の学習支援を希望する約 50 人に、毎週１時間年間を通して学習支援を実施。
  (イ) 活動その２
  未就学児向けプログラム
  基山町のこども課と町内にある６つの保育園、こども園、幼稚園と連携した発達を支援するためのプログラム。障害のあるなしに関わらず、希望者全員にたいしてインクルーシブな環境のもとプログラムを実施。
  (ウ) 活動その３
  親子で学ぶ学習教室の開催
  スクールソーシャルワーカーと連携して、障害のある子どもや、不登校など個別・最適化された教育機会が必要な子どもとその保護者が学ぶ教室を開催。
  参加した子どもたちからのアイデアで、楽しく勉強ができる場所という意味で「Tano−Ben」と銘打って月に６回実施している。

２−３ 出口戦略

行政の施策として投入を検討してもらえるよう相談をしている。子ども課、教育委員会への事業提案を行った

- ■ 小中学校の学習支援を適応指導教室として開催
  ※NPO いるかが継続して行う
- ■ 未就学児の４歳児検査のフォローアップ事業として継続
  ※一般社団法人基山こどもねっとが現在、基山町へ提案中。

3. 事業評価実施概要

3-1 実施概要

① 事業で起こしたかった重要だと思われる変化

- ■ 子どもたちの変化
  自己肯定感と自己有用感を上げられるような活動にできたか？
  日本を含めた 7 カ国の満 13〜29 歳の若者を対象とした意識調査（我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（平成 25 年度））の結果によると、

・自分への満足度
・わからないことへの意欲的な取り組み
のいずれも他国に比べると低い。
障害のあるこどもの中には、他者との関わりの中で「自分には出番がない」や「がんばってなにかやってみたい」と思う機会の少ない子が多くいる。
今回の学習・発達支援の事業を通じて、「小さなできた」や「わからないことがわかることの楽しさ」という経験を通じて自己肯定感と自己有用感を高めたいと考え事業を行った。

■ 保護者の変化
・子育てに対しての不安の払拭と安心感の獲得ができたか
・子どもへの関わり方に良い変化が起こったか
の２つ変化を期待して事業を行った

■ 地域や関わる大人の変化
ボランティア講師などの大人が、子どもの成長に対しての考え方の変化
関わる大人の、子どもへの関わり方のスキルの向上
大人同士の関係性や、結果としてのコミュニティの変化
を期待して事業を行った。

② 変化を捉えるための調査方法

■ 子どもたちの変化
(ア) 子どもへの調査、その１
- アンケート調査（主な項目は ◎プログラムの満足度　◎思考の変化　◎行動の変化）
- 調査実施時期：:2021 年３月　第二回調査：2022 年３月
- 調査対象者：活動に参加している小中学生 40 人

(イ) 子どもへの調査、その２
- アンケート調査（主な項目は ◎プログラムの満足度　◎思考の変化　◎行動の変化）
- 調査実施時期：2022 年３月調査対象者
- 活動に参加している小中学生 50 人

■ 保護者の変化
(ウ) 保護者への調査　その１
- アンケート調査（主な項目は ◎プログラムの満足度　◎思考の変化　◎行動の変化）
- 調査実施時期：2022 年３月
- 調査対象者：活動に参加している小中学生の保護者５０人

(エ) 保護者への調査　その２
- アンケート調査（主な項目は　◎子育てに対しての安心度　◎子どもの変化）

- 調査実施機関　2022 年 11 月
- 調査対象者：親子の学習教室に参加している保護者

(オ) 保護者への調査

- インタビュー調査（子育てに関するインタビュー）
- 調査実施期間：2022 年９月～11 月
- 調査対象者：親子の学習教室に参加している保護者

■ 関わる大人（地域の大人やボランティア）の変化

(カ) ボランティア講師へのアンケート

- 調査方法：アンケート（主な項目は ◎自身の変化　◎子どもたちの変化）
- 調査実施時期：2022 年３月
- 調査査対象者：全国とオンラインでの個別学習教室の講師　40 人

(キ) ボランティア講師へのアンケート

- 調査方法：インタビュー（主な項目は ◎自身の変化　◎子どもたちの変化）
- 調査実施時期：2022 年 10 月
- 調査査対象者：地域住民で関わっている大人

③ 調査**結果をどのように深掘りし価値判断をしたのか**

一緒に活動している、臨床心理士、スポーツインストラクター、スクールソーシャルワーカー、児童発達支援員などと、定量のアンケートと、日頃の活動の様子の観察などを交えて子どもたちや保護者の変化について議論を重ね価値判断を行った。

３－２ 実施体制

評価に関しての責任者　一般社団法人基山こどもねっと　宮原 昌宏

活動に対して協働している専門家

臨床心理士　鎌田玲奈氏

佐賀県教育委員会　スクールソーシャルワーカー　渡辺知恵氏

スポーツインストラクター　河合文太氏

行政関係者

基山町こども課　課長　山本

特定非営利活動法人　ソーシャルバリュージャパン　伊藤枝里子

4. 事業の実績

４－１　インプット

① 人材

- 事業責任者１名
- 小中学生の学習支援担当者　１名
- 未就学児むけの発達支援担当　１名
- 教室担当者　各回　１名
- 講師ボランティア　各回５名　（NPO いるかの登録講師　全国で約 300 名）

- 専門家　６名
  臨床心理士、スクールソーシャルワーカー、スポーツインストラクター、発達支援相談員、さくらんぼリズム講師
- その他
  保育園、こども園で担当保育士・幼稚園教諭にプログラムに参加および補助

②　資機材

- 小中学生の個別学習支援
  タブレット 10 台、Wi-Fi２台、公民館・小学校の教室
- 未就学児の発達支援
  ピアノ、運動ができる保育施設
- 親子の学習教室
  体育館、体育道具（ボール・コーン)、「勉強の技術」などの教材、椅子・机

③　経費実績

- 当初の計画金額
  2594 万円
- 実際に投入した金額
  2730 万円
- 小中学校の子供達の個別学習支援「マナビバ」の開催
  個別の学習支援を希望する約 50 人に、毎週１時間年間を通して学習支援を実施。

④　自己資金

- 契約当初の自己資金の計画金額
  150 万円
- 実際に投入した自己資金の金額と種類
  286 万円
- 資金調達で工夫した点
  助成金の獲得

４－２ 活動とアウトプットの実績

① 主な活動

(ア) 活動その１

小中学校の子供達の個別学習支援「マナビバ」の開催

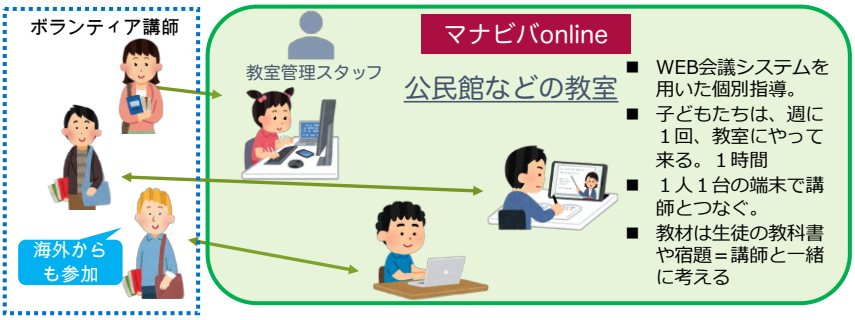
個別の学習支援を希望する約 50 人に、毎週１時間年間を通して学習支援を実施。

■個別学習支援「マナビバ」

- 個別の学習支援
  - ・講師はボランティア
  - ・講師とマンツーマン
- 主役は“こども”
  - ・まなびたいことを
  - ・それぞれのペースで

基山町の教育委員会と基山・若基小学校と連携して個別の学習支援教室を実施。

子どもたちは、週１回、若基小学校や、公民館にやってきて、講師の人とマンツーマンで「自分がやりたい勉強」を１時間行う。



場所 ※区は公民館	曜日	日数/年	参加者		
			合計	小学校	中学校
9区	月	45	12	11	1
若基小	火	45	8	8	
若基小	水	45	10	10	
10区	木	45	11	10	
11区	金	45	10	10	
合計		**225**	**51**	**50**	**1**

(イ) 活動その２

未就学児向けプログラム

基山町のこども課と町内にある６つの保育園、こども園、幼稚園と連携した発達を支援するためのプログラム。障害のあるなしに関わらず、希望者全員にたいしてインクルーシブな環境のもとプログラムを実施

３期のプログラム

１期
- ■ 耐性（体力・情緒的安定）
- ■ 身体機能・運動能力

２期
- ■ 好奇心
- ■ 集中力

３期
- ■ 理解力（言語理解・発語）

１期：さくらんぼリズム

音楽に合わせて体を動かす活動を通して、「運動神経」「感覚神経」「脳中枢神経」を発達させる

２期：集中→自分で考えて行動

- ■ 集中を学ぶ
  見る、聞く、心を落ち着かせる
- ■ 言葉の指示で行動する。
  ①質問を理解する
  ②質問されたことを考える
  ③行動に移す

３期：座る練習をする。

マンツーマンで座る練習。

- ■ 座り方を教える。
- ■ 自分で課題を選ぶ→主体性
- ■ 褒める→勉強の楽しさを実感

2021年度実績

園	園児数	希望者	プログラム		
			１期	２期	３期
基山保育園	53	53	７回	8回	４回
ちびはる保育園	4	4	５回	5回	3回
ころころ保育園	11	11	５回	3回	０回
たんぽぽこども園	33	31	５回	3回	3回
バディ保育園	33	31	５回	3回	3回
見真幼稚園	37	30	５回	0回	0回
合計	**171**	**160**	**35回**	**22回**	**17回**

(ウ) 活動その３

親子で学ぶ学習教室の開催

スクールソーシャルワーカーと連携して、障害のある子どもや、不登校など個別・最適化された教育機会が必要な子どもとその保護者が学ぶ教室を開催。

参加した子どもたちからのアイデアで、楽しく勉強ができる場所という意味で「Tano–Ben」と銘打って月に６回実施。

Tano-Ben

夢中の２時間でスッキリ！

親子で作る
「勉強と運動の楽しさを実感する学びの場」

教科は２つ
「体育」と「国語」

エネルギーチャージ

【体育】

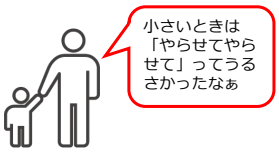
- リズムジャンプ
  音楽に合わせ体が勝手に動き出す
- みんなで遊ぶ！
  スポーツ鬼ごっこなど、異年齢で一緒に汗びっしょり！

自信が湧いてくる

【国語】

辞書を使って「Aha！」体験

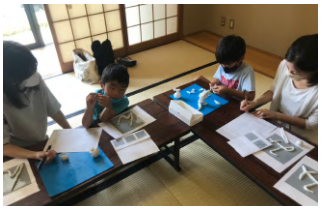
- 教材
  好きな歌詞でもなんでもOK！
- 自分の「言葉」が増える
  粘土なども使って、自分の中に言葉を育てる
- 「わかる」は楽しい
  子どもはみんな楽しむ力を持っている



グランドルール

- 「やりたくない」もOK
- 「やってみよう」は失敗しても成功
- 評価はなし！
- 自分なりに楽しく

国語担当レイナさん



体育担当の文ちゃん

月	回	日	場所	参加者			内容
				合計	子ども	大人	
4月	1	16	町民会館会議室	8	4	4	キックオフ
5月	2	14	町民会館会議室	4		4	ボランティア研修会
	3	17	町民会館会議室	4		4	ボランティア研修会
	4	19	町民会館会議室	4		4	ボランティア研修会
	5	20	町民会館会議室	4		4	ボランティア研修会
	6	26	町民会館会議室	4		4	ボランティア研修会
	7	31	町民会館会議室	4		4	ボランティア研修会
	8	28	町民会館会議室	9	4		親子の学習教室　Tano−Ben
6月	9	18	町民会館会議室	18	9	9	親子の学習教室　Tano−Ben
	10	24	バディ	16		16	子供のはったつについての体験会・勉強会
	11	25	町民会館会議室	14	7	7	親子の学習教室　Tano−Ben
	12	9	町民会館会議室	16	9	7	親子の学習教室　Tano−Ben
	13	23	町民会館会議室	25	12	13	親子の学習教室　Tano−Ben
	14	26	見真幼稚園	26	10	16	親子の学習教室　Tano−Ben
8月	15	18	ちぎりファーム	21	11	10	体験学習「星空を観測会」
	16	20	町民会館会議室	15	0	15	親子の学習教室　Tano−Ben
	17	20	鳥栖市教育院会	17		17	肥前精神医療センター医師と学校教諭による情報交換会
	18	26	町民会館会議室	18	8	10	親子の学習教室　Tano−Ben
	19	29	基里	7	2	5	親子の学習教室　Tano−Ben
9月	20	3	町民会館会議室	16	9	7	親子の学習教室　Tano−Ben
	21	5	基里	22	12	10	親子の学習教室　Tano−Ben
	22	7	基里	21	9	12	親子の学習教室　Tano−Ben
	23	17	バディこども園	18	8	10	親子の学習教室　Tano−Ben
	24	21	みやきメディカルセンター	18	8	10	親子の学習教室　Tano−Ben
	25	28	基山町民会館	11	4	7	親子の学習教室　Tano−Ben
10月	26	5	基里	17	7	10	親子の学習教室　Tano−Ben
	27	12	基山町民会館	11	4	7	親子の学習教室　Tano−Ben
	28	16	ちぎりファーム	42	17	25	親子の学習教室　Tano−Ben
	29	19	基里	13	6	7	親子の学習教室　Tano−Ben
	30	23	ちぎりファーム	30	10	20	体験学習「稲刈り」
	31	26	基山町民会館	14	6	8	親子の学習教室　Tano−Ben
11月	32	2	基山町民会館	23	12	11	親子の学習教室　Tano−Ben
	33	2	基里まちづくり推進センター	16	8	8	親子の学習教室　Tano−Ben
	34	9	若葉町作り推進センター	17	8	9	親子の学習教室　Tano−Ben
	35	11	ちぎりファーム	34	20	14	体験学習「芋掘り」
	36	16	基里まちづくり推進センター	12	5	7	親子の学習教室　Tano−Ben
	37	19	基山町広場	164	104	60	マンマフェスタ こどもの人権を考える１日
	38	30	基里まちづくり推進センター	12	5	7	親子の学習教室　Tano−Ben
12月	39	3	バディこども園	5	2	3	親子の学習教室　Tano−Ben
	40	7	鳥栖社協	15	8	7	親子の学習教室　Tano−Ben
	41	14	若葉町作り推進センター	14	7	7	親子の学習教室　Tano−Ben
	41	17	基里まちづくり推進センター	6	3	3	親子の学習教室　Tano−Ben
	42	24	ちぎりファーム	30	10	20	体験学習「餅つき」
			合計	815	368	442	

② アウトプットの実績

アウトプット	指標	初期値/初期	目標値／目標状態	目標達成時期	実績値
入学前のインクルーシブな学習支援教室において、児童向けに、モデリングメソッドを活用した入学準備の場の提供	教室の開催頻度	なし	週1回を実施	事業終了時	20年度：33回実施 21年度：36回実施 22年度：34回実施（12末現在）
発達障がいを持つ小学校・中学生を対象とした地域の公民館等を利用した学校連携型学習支援教室	教室の開催回数	なし	週1回を実施	事業終了時	20年度：40回実施 21年度：45回実施 21年度：45回実施
入学前児童・小学生・中学生を対象とした学習支援センター事業	教室の開催回数	なし	週1回を実施	事業終了時	42回開催 ※20,21年度はコロナで開催できず ※22年度は週1.5回開催
特別進学学級に通う子ども達とその保護者への学習、進路相談	進路相談を実施した回数	なし	のべ1200件	事業終了時	相談件数852件 ※低学年の参加だったので進路相談を発達相談に変更 ※20,21年度はコロナの影響で実施できず
子ども達にかかわるstaffへの学習、進路相談研修	研修を実施した回数	なし	72回	事業終了時	■小中学生への講師：39回 ■未就学児：28回 ■センター事業：8回

４－３ 外部との連携の実績

外部との連携では

プログラム時だけでなく、子どもたちを取り巻く関わる学校や、保護者、地域の人との連携を図り、日常の中で、子どもたちが安心して成長できる環境づくりにつながることを大切にして活動をしてきたそのために

(ア) 行政や学校や園との連携

(イ) 保護者や地域との連携

(ウ) 専門家との協働

に力を注いだ。

■ 保育園・こども課との連携

- プログラムの設計

  基山町４才児就学準事業として、得意なことと苦手なことの検査を行い保護者にフードバックを行っていた。子ども課と連携し、この検査結果を元に

  ・全員が笑顔で小学校に行ける

  ・４０分、ストレスなく机に向かって座れる

  状態を、６つの園と協働することを方針としてプログラムの設計した。

  この際、４歳児就学事業を行っている臨床心理士に多くの尽力をいただいた。

- プログラムの実施

  当初は、保育時間外で独自のプログラムとして実施する予定だったが、基山町内にある６つの園（こども園、保育園、幼稚園）と協働し保育時間内でプログラムを行うことで、日常の保育や教育への接続を図った。

- 勉強会・研修会の実施
  ６つの園の保育士・幼稚園教諭の情報交換会や、保護者と保育士にプログラムの体験会や研修会を行っ

■ 小学校・教育委員会との連携

- プログラムの設計
  当初、公民館で対面での学習支援プログラムを実施する予定だったが、新型コロナ感染症の拡大に伴い、オンライでの個別学習支援プログラムに変更。
- プログラムの実施
  - ✓ 感染症が落ち着いているとき
    町内の５箇所の公民館などに子どもたちが通い、オンラインで講師は遠隔から入って授業を行う
  - ✓ 感染症が蔓延しているとき
    子どもたちは自宅で、オンラインで講師は遠隔から入って授業を行う。希望があればタブレットや Wi-Fi の貸与を行う。
- 小学校での開催
  基山町内には２つの小学校があり、その内の若基小学校は、小規模特認校で、特別支援級に多くの子どもが校区をまたぎ通っている。その中でも低学年のこどももプログラムに参加しやすいよう、学校の教室を借りて週２回実施することにした。

■ 地域との連携

- 保護者や地域の大人との連携
  親子の勉強会を通じて、他者の子どもを違う保護者が教え合う機会を作り 2022 年度は 12 月末までに４２回の勉強会と体験学習回を開催。指導力を担保するために「勉強の技術」という教授法の研修も行った。

- 佐賀県の教育委員会のスクールソーシャルワーカーとの連携
  発達障がいのある子どもの中には集団生活が得意でなく、不登校になる子どもも多い。
  スクールソーシャルワーカーがつながっている不登校のこどものための出張フリースクールを毎週開催。
  子育てに役にたつための「ペアレント・トレーニング」を臨床心理士によって開催。
- 生産農家との連携
  体験機会の少ない子どもたちのために、自然とのふれあいの中での学習会を開催

農家の元牛舎を使って星空鑑賞会

ちぎりファームでの芋掘り体験会

5.アウトカムの分析

5-1 アウトカムの達成度

① 短期アウトカムの計画と実績

短期アウトカム	指標	初期値/初期状態	目標値／目標状態	目標達成時期	実績
発達障がいをもつ未就学児が小学校入学前児童が小学校に適応しやすくなる。	座った状態を一時間継続できている	なし	児童の９０％が一時間座って学習する。	事業終了時	87%の子どもが40分間座って活動ができている ※2021年度終了時
発達障がいを持つ入学前児童・小学生・中学生を対象とした学習会へ継続して参加できるようになる。	学習支援の場への継続参加率	なし	児童・生徒の継続参加率70%	事業終了時	95%が毎週学習会に継続して参加
入学前児童・小学生・中学生を対象とした学習支援センター事業」により、発達障がいを持つ児童の学力が向上する。	学習指導要綱に沿った学習習得単元の増加	なし	算数等の科目においての成績向上	事業終了時	学力の向上がみられたのは10%
発達障がいを持つ児童たちが、自分の進路や進学の希望が整理できた状態になる。	進路希望調査に付属するアンケートの項目の「わくわく感」と「進路の希望の整理」	なし	アンケート項目の納得度、わくわく感の数値が70%以上となる児童が全体の７０％ 相談後の「進路や進学の希望の整理が出来た」項目の満足度50%	事業終了時	小学生以下に対象としたため進路についての変化確認できなかった。
発達障がいを持つ入学前児童・小学生・中学生の保護者が「子育に対しての安心感の獲得」「自分の子供の将来に期待を持つ」ようになる。	「子育ての負担」「子供達への将来への期待」	なし	「子育ての不安」が、10%のマイナス。「子供達への将来への期待」で10%の増加を目指す	事業終了時	■安心感 80%の保護者が安心感が増加 ■不安の解消 20%の保護者が不安が減少
ボランティアたちが学習支援教室で子どもたちの学習をサポートすることで、参加したボランティアに「人の能力とやる気を引き出すスキル」が身につく。	ボランティアに事前事後のアンケートを実施し評価を行う。	なし	「能力とやる気を引き出すスキルがある」、「自己肯定感・自己効力感」の項目で10%の向上を目指す	事業終了時	■コミュニケーション 38%の講師が「子どもとのコミュニケーションのスキルが向上した」 ■学力向上 20%の講師が「勉強の教え方がうまくなった」
発達障がいを持つ入学前児童・小学生・中学生が学習支援や進路相談を行なうことにより、自己肯定感が向上した状態になる。	「自己肯定感」「自己効力感」の向上	なし	事前事後のアンケートを実施し、「自己肯定感」「自己効力感」の10%向上を目指す。	事業終了時	■自己肯定感 25%の子どもが「自身がついた」 ■自己効力感 13%の子どもが「勉強以外に興味のあることを探すようになった」

② アウトカム達成度についての評価

今回の事業では、特別支援学級などに通う発達障がいのある子どもたちへの学習支援を主に行う予定だった。事業をスタートするにあたり、行政や学校、保育園・幼稚園などのステークスフォルダーと競技した結果

■ 対象を未就学児～小学生に絞った

未就学児については、小学生に入ってからのギャップの軽減をゴールに実施。その後の継続的な支援につなげていくために当初予定していた中学生の数を減らし、小学校の低学年が多くプログラムに参加できるようにした。

■ 学習支援だけでなく発達支援に力を入れた

教科学習だけでなく、子どもたちの発達の遅れを取り戻すために地域の資源を活かした体験型の学習を行った。

個別の学習支援だけでなく、

- 保護者への情報提供や、保護者の学習の機会の提供
- 保育園との協働
- 地域住民や、地域資源の利用

などが必要なことがわかった。

それを、踏まえアウトカムの達成度を評価すると

(イ) 子どもに対してのアウトカム

✓ 未就学児

小学校にスムーズに入学できる状態をアウトカムと設定し、目標を授業の間リラックスして集中できる状態を目指してプログラムを行った。

一定時間座るためには、体の育ちがないと姿勢を保つことができない。そこで、

【第一期】全員に対して、リズムを取り入れた運動のプログラム

【第二期】眼球を動かす練習、呼吸法などで、集中と自制の力を育むプログラム

【第三期】識字がうまくいくための、指先だけでなくて全体を使ったプログラム

などを、保育士や幼稚園教諭と協働しながらプログラムを行った。

結果、目標としていた 90%には届かなかったものの 87%の子どもが４０分間机にむかって集中できる状態を作ることができた

✓ 小中学生

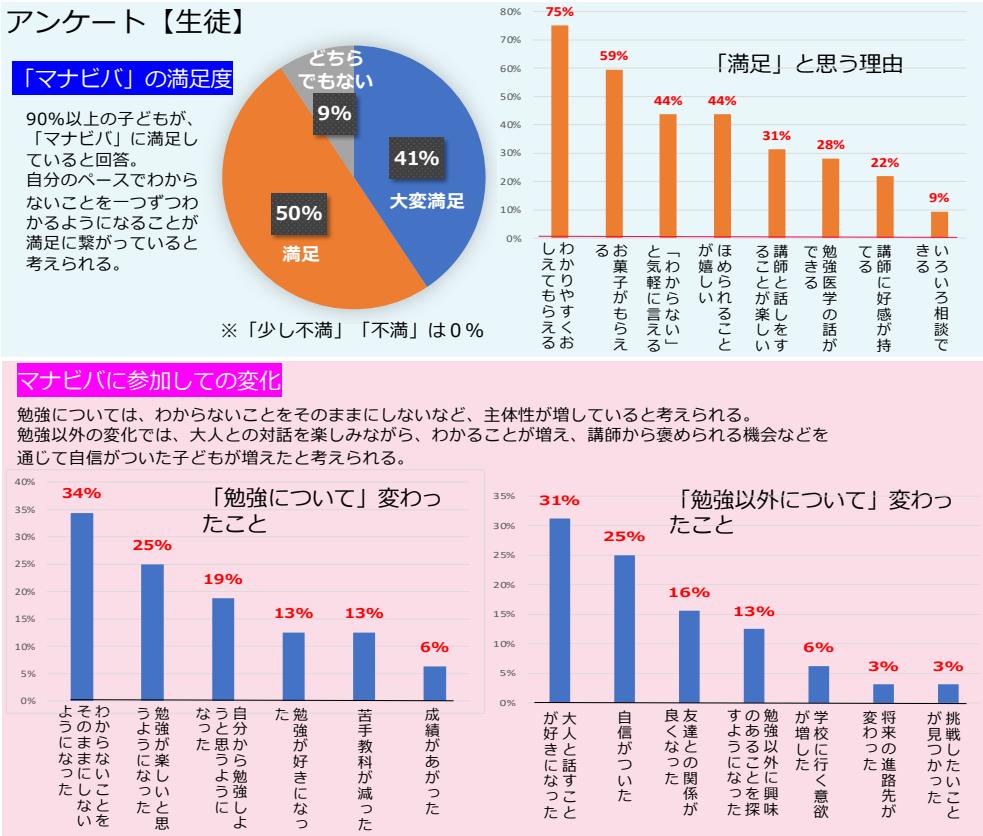
学習に対して、「主体的に参加する力」と「学力向上」をアウトカムに設定して活動を行った。

学習教室への継続参加率　９０%に対しては、95%と目標を達成したが

学力向上の 50%に対しては 10%と目標に届かなかった。

学習教室への継続参加が 95%だった背景には、「マナビバ」への満足度が 91%非常に高く、その理由としては、ボランティアの講師がマンツーマンで親身になって授業をおこなうことで、わからないことをそれぞれのペースでわかるようになっていることが、子どもたちにとって意味のある時間になっていると考えられる。その結果、わからないことをそのままにせず主体的に勉強するようになったり、勉強が楽しくなったと感じる子どもも一定の割合増えた。自分が好きになることにもつながっている。

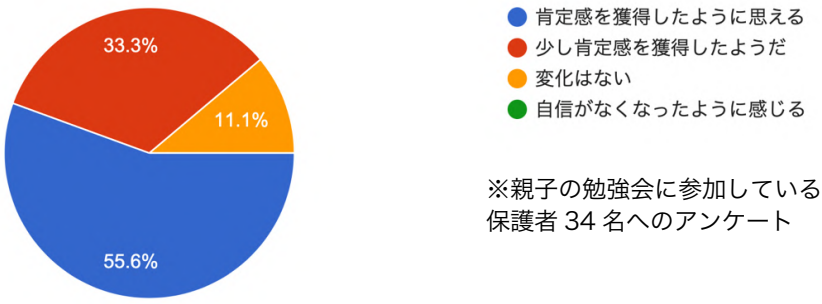
また、大人と話をすることが好きになったと回答した子どもも３割に登る。



✓ 自己肯定感について

個別の学習支援「マナビバ」に参加している子どものうち２５％が自信がモテるようになったと回答。一方、親子の勉強会「Tano–Ben」に参加している保護者の約 90%が、我が子の「自己肯定感を獲得」を実感している。

お子さんの変化について
自分に対しての肯定感に変化はありましたか



※親子の勉強会に参加している
保護者 34 名へのアンケート

子供だけでなく、親子で一緒に参加することで、保護者は以下のコメントにあるように、子どもたちを客観的に捉えて、子どもに向かう姿勢があることで、子どもたちの自己肯定感の獲得につながっていると考えられる。

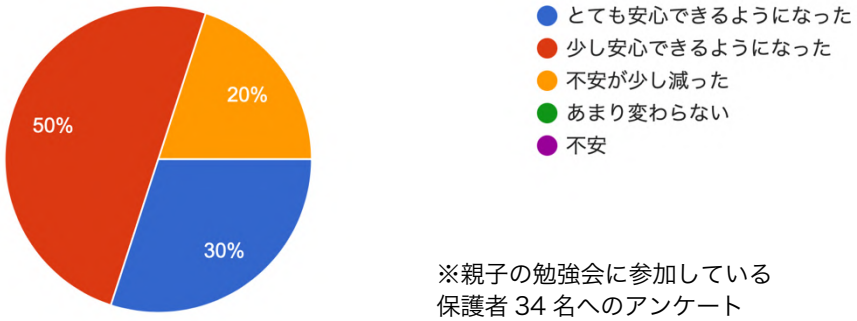
- 毎回の活動を楽しみに行ける。粘土の活動を通して、家でも創作の幅を広げたりできた。年齢の離れたお子さんとの関わり合いのおかげで、初対面や馴染みない方の中に入る抵抗も少し和らいだ気がする。
- 初めての場所や人に対して人見知りが減った。言葉やその他の表現が増えた。
- みんなの前で発表したり、自分の意見をしっかり言えるようになったと感じます。苦手だった漢字が、辞書の活用によって少しずつ書けるようになりました。
- 計画的に行動しようとする様子が見られるようになった。
- 癇癪が前より落ち着いてきた気がします

✓ 子どもにとっての進路に対しての変化
対象を未就学児から小学生に絞ったことで、進路に関して関心を持っている子どもがすくなく、「将来に対してのわくわく感の向上」というアウトカムを達成することはできなかった。

（イ） 保護者に対してのアウトカム

✓ 子育てに関しての安心感の獲得について
親子の学習会において、異年齢の複数の子供達の中で、子どもたちの活動や変化していく姿をみることで子どもへの理解が深まっている。また、他のこどもの学習の支援に関わることで、自身の子どもへの対応の仕方学ぶ機会につながっている。また、臨床紳士や発達支援の人を交えたペアレント・トレーニングによって子育ての安心感と対応力を獲得した結果、安心感や不安の解消につながっていると考えられる。

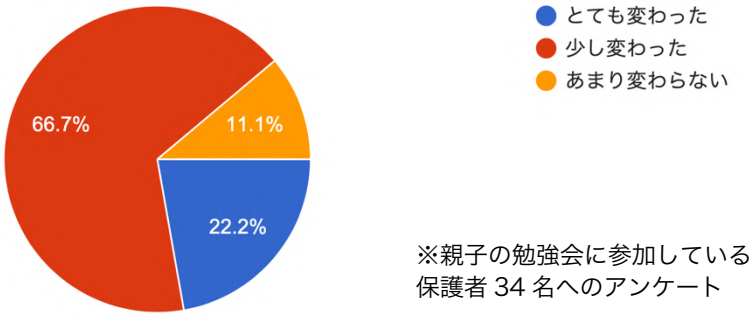
ご自身の子育てに対しての安心感や不安感に
変化はありましたか



※親子の勉強会に参加している
保護者 34 名へのアンケート

- 相談したいときに、気軽に臨床心理師さんなどに相談できる
- 我が子は幼児で参加しているが、様々な年齢のお子さんと接し活動する中で、自分の子供ではないからこそ、落ち着いて余裕を持って接することが出来たり、寄り添えやすい部分もあった。またそれを活動後に共有できる時間が自分にはよかった。
- 個人の成長スピードや性格の多様性を認め合う事で、自身や自身の子供に対してより肯定的に感じれるようになった。
- 他の大人に我が子と関わってもらい、それぞれの方から我が子の現状・気持ちなどを考えて伝えてくれることで、視点や視野を変えることにつながったように感じる。
- 私と同じような方がいて、その方の体験談を聞いて私だけじゃ無いんだと安心できた。

お子さんに関しての考え方や接し方に
変化はありましたか



※親子の勉強会に参加している
保護者 34 名へのアンケート

- 毎回のフィードバックで、我が子の活動時の様子や変化を詳しく知れて、新しい発見があった。ゆっくりじっくりでよいという心構えを意識できるようになった。
- 様々なお子様と触れ合えて、多様性を学ぶ事ができました。
- 子供のやりたい事や好きな事に対してすぐ意見したりするのではなく、ゆっくり見守って待つことができるようになりました。
- 不登校を受け入れることができた
- 少しずつですが、娘に対して、心からありがとうと思えるようになりました。
- もう少し子どもの気持ちや意見を聞いてみようと思うようになった。
- 癇癪が起きていても冷静に対応できるようになってきた。

(ウ) ボランティアに対してのアウトカム

■コミュニケーション

38%の講師が「子どもとのコミュニケーションのスキルが向上した」

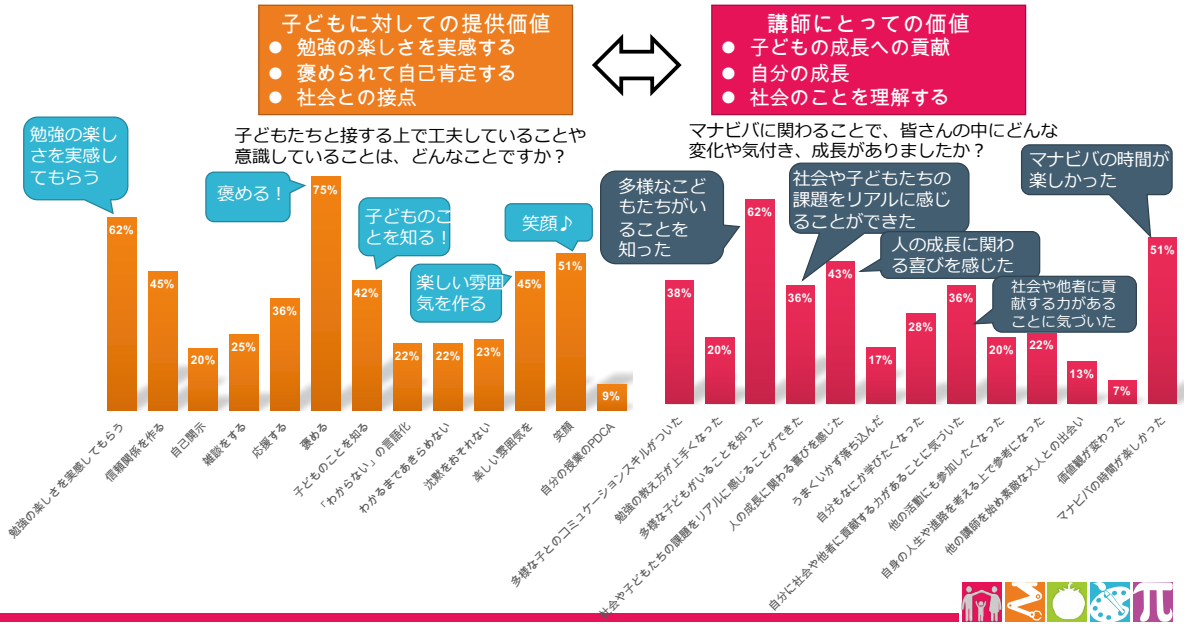
■学力向上

20%の講師が「勉強の教え方がうまくなった」

と回答している通り、子どもたちの学習支援に関わることで、格子にとっても一定のスキルの向上をみることができた。

それに加え、「多様なこどもがいることを知った」といった社会に対しての知見が広がったり、「人の成長に関わる喜びを感じた」といった社会に対して貢献するきっかけをとどけることにもつながった。

■講師アンケートでわかったこと→講師と子どもが共に学び、成長する場所



５－２ 波及効果

発達障がいのあるこども中には、特別学級で個別指導を受けて入るが、その多様性に対応することが難しいことや、数の増加に学校の体制が追いついてないなどの理由で。集団生活が苦手で不登校になる子どもが一定程度いる。さらに活動を始めて想定外に感じたことは、発達障がいの有無に関わらず、不登校になる子どもが急激に増えている。学校にいけないことで十分に発達の機会を得ることができない子供がとても多い。

スクールソーシャルワーカーからの要請もあり、フリースクール的なことを開始した。最終年度から始めた事業のため、十分な人材や、資金などがなかったので、親子で参加してもらい、保護者同士の関わり合いの中で役割と作っていった。その結果、学び合い支え合うコミュニティが形成され、今後地域共生社会のきっかけになるような組織ができ始めている。

５－３ 事業の効率性

5. 成功要因・課題

コロナ禍で、スタートが遅れ、対面での活動が制限される中で、関わりを持てた子どもたちには一定の変化を届けることができたその要因は

(ア) 子どもたちの変化

子どもたちに、個別的に最適化された環境を作ることで、自信をなくしていた子どもたちが大きな変化を起こすことを実感した。変化が起こるプロセスは

① 安心安全な環境を作る

まずは、大人が評価やプレッシャーのかからない安心・安全な環境をつくる

② 子どもたちの関心を引き出す

子どもたちが興味を持ちそうなコンテンツを用意し、子どもが関心を寄せるまで待つ

③ 子供同士のコミュニケーションを活性化させる

最低限守って欲しいルールを考えさせ、異年齢の子供同士が関わり合う場を提供し、子供同士が話をして、考える機会を増やしていく

(イ) 大人の変化

当事業では、講師のボランティアや保護者、専門家など多くの大人に関わっていただいた。子どもたちの主体性を引き出し、子どもたち同士を掛け合わせることで大きな変化を感じた大人がいた。

(ウ) 社会の変化

障害のある子どもや、不登校などの課題を感じている家庭のコミュニティの核ができた。この活動を継続することで地域全体で子どもを育てていくような雰囲気が出始めている。

一方で、先日、文部科学省が公表したとおり、小・中学生の不登校が全国で２４万人を超えた。そのような中

■ 課題その１　保護者に余裕がない

当該エリアでも同様の傾向。当事業は、保護者と一緒に子どもたちの育ちと学びの環境を作っていくことを大切にしているが、困窮などの理由で保護者に時間や余裕がない家庭にプログラムを提供することができていない。

■　課題その２　公共教育機関と地域の連携

学校現場は、コロナに加え、不登校など、様々な課題に対応すべく多忙を極めている。学校と地域社会との連携が求められているが、学校側と地域をつなぐための人的、財務的な資源は、とても乏しい。学校だけでも、あるいは家庭だけでも解決しない課題をどのように解決していくかは地域にとって、とても大きなテーマだと感じている。

6. 結論

７－１　事業実施のプロセスおよび事業成果の達成度の自己評価

	多くの改善の余地がある	想定した水準までに少し改善点がある	想定した水準にあるが一部改善点がある	想定した水準にある	想定した水準以上にある
（1）事業実施プロセス				○	
（2）事業成果の達成度				○ ※条件つき	

７－２　事業実施の妥当性

■　事業実施のプロセス

コロナ禍でスタートした当事業。学習・発達支援という事業の特性上多くの困難があったものの、小中学校では、オンラインでの学習支援に切り替えたり、未就学児は、保育時間内で、安全な環境を園との協働で確保し実施できたりするなど、初年度こそスタートに遅れが生じたものの、３年という実施期間の中ではその遅れを取り戻し、予定通りのプログラムを実施し、計画していたアウトプットは概ね実施することができた。

■　実施成果の達成度

短期的アウトカムにおいて

(ア) 子どもたちに対してのアウトカム

少年学生向けのプログラムでは 95%の継続率と、90%以上の満足度を獲得。主体的に勉強に取り組んだり、勉強が好きになった子ども一定程度いたりするなどした

(イ) 保護者に対してのアウトカム

子育てに対しての不安の解消は図れた

(ウ) ボランティアに対してのアウトカム

学習支援のスキルの向上と、地域課題への関心の醸成が図れた

以上のことから想定していた短期アウトカムは達成できたと考えている。

条件つきとした理由

①　達成できなかった短期アウトカムがある。

当初、中学生の学習支援に力を注ぐ予定だったが、未就学児のプログラムを行うことで、小学校低学年の接続の優先度があがり、対象を未就学児～小学生に絞った。そのため「将来の進路につなげる」という取り込みができず「進路へわくわく感の醸成と不安の払拭」というアウトカムを出すことができなかった。一方、低年齢にシフトしたことで保護者との協働が増え、子どもを取り囲む環境の整備については想定以上の効果をだすことができた。

② 中長期アウトカムへの接続

現在、基山町でプログラムの予算可に向けて検討していただいているが、予算化が確定していないのと、予算可されても公募になる可能性もあり弊社が継続できるかが未確定

7. 提言

今回の子どもの学習支援、子育て支援に関わる中で、不登校の問題に加え、スクールソーシャルワーカーなどとのつながりの中で、困窮や孤立している家庭が想定以上に多い事実にぶつかった。この問題は、学校や家庭だけでは解決できるどころかますます悪化していくことが懸念される。行政が主導になり、NPO や自治体、社会福祉協議会など地域の資源と最大限活用し、地域共生社会を構築していくことの必要性を感じている。子どもの幸せを実現するためには、子どもの４つの人権

① 生きる権利→食べることに困っている子どもがいる
② 育つ権利→教育を受けられない子がいる
③ 守られる権利→虐待を受けている子どもがいる
④ 参加する権利→子どもたちの声に耳を傾ける大人がすくない

を中心にしながら、全ての子どもが取り残されない地域社会を作っていきたい。

8. 知見・教訓

当事業は、全国にいるボランティア講師や地元の行政職員や市民、企業など多くの方に支えられて行ってきた。活動の中で実感したのが

- 「なにを頑張ったら良いかわからない」という保護者
- 「自分には活躍のステージがない」と感じている子どもたち

の存在でした。

誰も取り残さない社会に必要なのは、全ての人に「つながり」と「役割」と「居場所」であることを知ることができました。

生きていくことは大変なことという前提で「みんなで豊かに生きていこう！」をどうやったら実現できるかを、子どもと一緒になって考えて、「税金を払える子どもをどのように育むか？」を地域で考えていくことが必要ではないかと感じています。